

「アガペー」は神の愛を表す言葉か

東京都立山崎高等学校 中村康英

ギリシア語で愛を表す言葉であるアガペーとエロスは一般的に広く知られている言葉である。アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であり、エロスは性的な愛を語る時に使うことができる言葉であるとともに、自分の中にないより価値のあるものを求め自分のものにしたいと願う愛として知られている。以上のような、アガペーとエロスについての考え方は一般的に承認されているものであり、それは教科書の中にも反映されている。その根拠を最近の高等学校教科書において表記されていることを通して示しておく。

「放蕩のかぎりをつくし、落ちぶれて帰ってきた息子をやさしくだきかかえる父親に神をたとえて、神の愛がどんなものであるかを教えた。そのような神の愛は、アガペーという言葉で表現されるが、それは他者を生かす無差別、無償の愛であり、ギリシア的な、自分に欠けたより価値の高いものを求める愛であるエロスとは異なる。」(東京書籍)¹

「エロスは、真・善・美のような価値あるものを求めて天上をあこがれていく『求める愛』であるのに対して、アガペーは、……(中略)……どんな価値のない者に対しても無条件に上から注ぎかける無差別の『与える愛』である。」(山川出版)²

「アガペーとしての愛は、価値や報いがあるからそのものを愛するというのではなく、無価値と思われるものをこそ愛し、はげまし、勇気づけてくれるものである。この愛は無差別平等の無償の愛として万人にそそがれる。」(清水書院)³

「魂をイデアへと向かわせる情念を、エロスという。完全なものへの思慕であるエロスは、人間の徳を向上させる原動力となる。」(清水書院)⁴

「(アガペーとは) どんなに弱く、無価値のように見える人に対しても、常に無償で、無差別に与え続ける愛のことで、価値のあるものを求めるギリシャ思想のエロスとは対照的である。」(中教出版)⁵

¹ 平木幸次郎ほか7名『倫理』来京書籍株式会社、51頁、2008年。

² 湯浅泰男ほか3名『倫理』山川出版社、35頁、2007年。

³ 菅野覚明・熊野純彦・山田忠彰ほか4名『新倫理 改訂版』清水書院、41頁、2007年。

⁴ 同書、31頁。

⁵ 勝部真長・持田行雄ほか8名『倫理』中教出版、48頁、脚注①、2003年。

この教科書のなかで描かれている愛は、キリスト教的な神の愛を表す言葉としてのアガペーと、自分に欠けたより価値の高いものを求め、自分のものにしたいと願うエロスである。ここでの愛の定義は、A. ニーグレンの愛についての理解の仕方に従って述べられていると考えられる。

アガペーとエロスについて論じ、アガペーはキリスト教的な神の愛を表す言葉であると断言した代表的な研究者はニーグレンである。アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であるとする彼の考え方は現在のアガペーとエロスについての一般的な理解に深い影響を与えている。いま述べたような、アガペーとエロスについて考え方とは別の理解が、オリゲネスの中にあることが指摘されている。⁶

1 節 アガペーとエロスについて

アガペーとエロスという愛を表す言葉が、研究者にはどのように理解されているのだろうか。

アガペーとエロスについて論じ、その意味をキリスト教的な神の愛を表す愛と、ギリシア的プラトンの愛を表す言葉として断言した代表的な研究者はニーグレンである。アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であると彼は述べる。

ニーグレンはエロスという言葉で表わされる愛とアガペーという言葉で表わされる愛について次のように語る。

「エロスとアガペーの相違は程度の差ではなくて、種類の相違なのである。」⁷

「一方の場合には、我々は自己中心の宗教を得るし、他方の場合は神中心の宗教を得るのである。」⁸

「ひとつの場合には神が個人の必要と願望の究極的充足として求められるし、他の場合には、神が人間の自我を全く支配する全能者として求められるのである。」⁹

アガペーは次のようなものであるとニーグレンは語る。

⁶ オリゲネス Origenes 184/5 - 253/4 キリスト教最大思想家の一人 最初の聖書学者アレクサンドリアに生まれる。ストア派、プラトン、中期プラトン主義の知識を吸収した。

⁷ Nygren, Anders, *Den kristna kärlekstanken*, 1930, (大内弘助訳『アガペーとエロス』I, 新教出版 1966年, 20頁。

⁸ 同上書, I, 14頁.

⁹ 同上書, I, 15頁.

「アガペーは神ご自身の人間に至る道である」¹⁰

「アガペーはキリスト教の愛の標準である」¹¹

「十字架上に示された愛は神ご自身の愛である」¹²

エロスとアガペーは本質的に種類を異にする愛であり、それぞれ自己と神という異なった方向を目指す愛であるとニーグレンは語る。さらに、彼は、アガペーで表される愛は神の愛の下降運動であり、神の愛がその愛の根本であると述べている。このアガペーという言葉によって人間の自己に対する愛を表すことはできないと、彼は考える。¹³

エロスについては次のように語る。

「エロス愛は、隣人を隣人自身のためにではなく、自分の必要を満たすためや、善への向上のための手段として求めるのである。…（中略）…そしてこの愛は、人間が、感覚の世界から実在の世界へ、昇っていく上昇運動の一つである。」¹⁴

「自己愛はエロスの本質そのものである。」¹⁵

さらに、エロスで表される愛において神自身には愛が欠けていると、ニーグレンは述べている。¹⁶

以上のように、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動でもあると定義し、エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であるとニーグレンは断言する。その考え方に立ってオリゲネスの愛について次のように主張する。

「救いの道についての彼（オリゲネス）の見解は、同じように明白にエロス説に依存している。それは、上昇運動、すなわち上昇の観念に全く支配されている。」¹⁷

オリゲネスの神の救いについての理解は、下降運動としての十字架上に示された神の愛、すなわちアガペーに基づくものではない自己愛というべきエロスに基づいているとニーグレンは述べている。即ち、オリゲネスはキリスト教を代表する3世紀の思想家ではあるがキリスト教の神によって表現された愛を理解せずにプラトンの範疇の中で神の愛を理解しているので真のキリスト教徒ではないと主張しているのである。

¹⁰ 同上書， I， 49 頁．

¹¹ 同上書， I， 62 頁．

¹² 同上書， I， 87 頁．

¹³ 同上書， I， 197 頁参照．

¹⁴ 同上書， I， 193 頁．

¹⁵ 同上書， I， 195 頁．

¹⁶ 同上書， I， 197 頁参照．

¹⁷ 同上書， I， 200 頁．

以上のような、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動であると定義し、エロスは自己愛であり必要を満たすための上昇運動であるという主張に対し、J.M. リストはエロスについてニーグレンとは別の理解を提示し、ニーグレンに反論している。

リストは『エネアデス』でプロティヌスが一者（神）はエロスであると述べているのに言及して、次のように述べている。¹⁸

「一者（神）をエロスというだけで、ニーグレンの見方に対する反論になる。何故なら、一者（神）が上昇する場所はどこにもないからである。」¹⁹

エロスという言葉が神である一者に帰せられることによってエロスという言葉はニーグレンのいう意味とは異なる意味を持つことになる。なぜなら、欠けるところのない一者（神）がさらに善くなる余地はないからである。このように、一者（神）が上昇運動の一つであるはずのエロスであると言うことによって、エロスで示される愛はニーグレンが主張する意味とは別の意味を持った言葉ではないかという見方を提示することができるようになる。即ち、エロスは自己愛であり必要を満たすための上昇運動としての愛では無く、アガペーの様な下降を示す愛であることを示唆することになる。リストは次のように述べる。

「一者（神）のエロスは上へも下へも向かわない。しかし、間接的ではあるが、一者は下へ向かう動きの原因である。」²⁰

さらに、プロティヌスにおいては示唆されているだけの下向きのエロスがオリゲネスにおいてはプロティヌス以上にはっきり示されているとリストは主張するのである。

「渴望であるエロスだけでなく下向きに流れるエロスをオリゲネスは認めている。」²¹

「プラトンとオリゲネスの間の相違は次のようなことである。即ち、知恵の愛又はイデアである神もしくは一者の愛が非人格的なものであり、生命のないものの愛であるのに対し、オリゲネスの花婿の愛は人格的な愛である。」²²

聖書の『雅歌』の花婿は人格を持った花婿であり、その愛はエロスという言葉で表現されている。そして、エロスという言葉で表現される愛で花嫁を愛する花婿とはキリストのことである。又、花嫁とは教会のことである。従って神であるキリストの愛は下向きの愛

¹⁸ プロティヌス 204/5-270 新プラトン主義の創始者。アレクサンドリアでアンモニオス・サッカスに師事した。オリゲネスと同門。

¹⁹ Rist, John M., *Eros and Psyche*, University of Toronto Press, 1967, P81.

²⁰ Ibid., p. 83.

²¹ Ibid., p. 207

²² Ibid., p. 210.

であり、その愛はここではエロスという言葉で表現されている。だから、ニーグレンのように、アガペーは神の愛であり、神から人に向かう下降運動でもあり、エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であると定義することはできないとリストは主張するのである。

エロスは自己愛であり、必要を満たすための上昇運動であるというニーグレンの主張に対し、プロティヌスにおいて示唆され、オリゲネスにおいてははっきり示されている下向きのエロスを提示することによって、リストは反論している。

ニーグレンの、神の愛であり神から人に向かう下降運動としてのアガペーと自己愛であり必要を満たすための上昇運動としてのエロスという構造を踏まえたうえで、リストは、エロスには下向きの運動があることを示すことで反論している。しかし C. オズボーンはニーグレンが提示した構造自体に異論を唱え次のように主張する。

『プラトンにとって、愛は、まず第一に、足りないために手に入れたいと望む何かを求める欲望である』というこの主張はニーグレンがプラトンの『饗宴』を読んでいくときの見力である。²³

「ニーグレンがディオティマの話のなかに見出したような、欲しいものを手に入れようとするエロスについての見解は、キリスト教のモチーフとしては納得のいくものではないということに同意することと、エロスを完全に否定することは、全く別のことである。」²⁴

オズボーンはニーグレンが示すエロスの意味自体に疑問を呈しているのである。ニーグレンが提示した意味でのエロスをキリスト教の神の愛を示すものとしては受け入れることができないからといって、エロスで表現される愛自体を拒否することにはならないと主張している。

「プラトンの『饗宴』は伝統的な方法で読まれるべきではない。プラトン自身が、何かを求める愛の対象を乞い求めると訴えることによって愛が説明されたり、愛が自己愛によって動機づけられているととられるべきではないという理由を示唆しているのである。」²⁵

「何かを求める愛の対象を乞い求めると訴えることによって愛が説明されたり、愛が自己愛によって動機づけられているととられるべきではないとプラトン自身、示唆している。」²⁶

²³ Osborne, Catherine, *Eros unveiled*, Oxford University Press, 2002, p. 54.

²⁴ Ibid., p. 55.

²⁵ Ibid., p. 54.

²⁶ Ibid., p. 55.

ここでオズボーンは、自己愛であり必要を満たすための上昇運動として、エロスを理解すること自体に異を唱えている。そのように異を唱えることはプラトン自身の考えに基づくものでもありと、主張している。

さらに、ニーグレンの主張するアガペーの理論についても異を唱える。

「エロスもアガペーも、寛容な関心と自己中心的な関心によって特徴づけられる愛を示すものである」²⁷

アガペーはキリスト教の愛の本質を表す言葉であり、エロスの本質は自己愛であるとするニーグレンの主張に反対し、オズボーンは、アガペーもエロスも他者に対する無償の愛と他者に何かを求める自己中心的な側面の両方を持つ言葉であると述べるのである。²⁸

『高められたアガペーはエロスと呼ばれる』と雅歌注解のなかでグレゴリウスは言っている。²⁹

「オリゲネスは、二つの言葉の間には重要な相違は全くないと主張している」³⁰

「オリゲネスのコメントは、アガペーとエロスという言葉は文の脈略のなかで良くも悪くも表現され得るということを示している」³¹

「高められたアガペーはエロスと呼ばれる」というグレゴリウスの主張と「二つの言葉の間には重要な相違は全くない」というオリゲネスの主張を根拠にしてアガペーとエロスは本質を異にする言葉ではなく似た内容を表現できる言葉であるというのである。このような理解に立った上でオリゲネスは、エロスという言葉は、神が与える利益や神の美しさを求める欲望によって駆り立てられるものと理解すべきではないと考えていると、オズボーンは述べる。

「オリゲネスは、エロスという言葉で述べられている神と魂が関わりを持つことを認めている。しかしその愛は神が与える利益や神の美しさを求める欲望によって駆り立てられるものではなく、神の愛の弓矢の傷によって駆り立てられるものである。」³²

「オリゲネスは、ニーグレンがプラトンの『饗宴』のなかで見出したような肉的な欲望による分析に向かうような傾向を全く示していない。」³³

²⁷ Ibid., p. 70.

²⁸ Cf. Ibid., p. 70.

²⁹ Ibid., p. 70.

³⁰ Ibid., p. 70.

³¹ Ibid., p. 70.

³² Ibid., p. 84.

³³ Ibid., p. 85.

オリゲネスにおける「エロス」についての理解は、それは「アガペー」という言葉と共通の意味をもち得る言葉であり、ニーグレンがプラトンの『饗宴』のなかで見出したような傾向を持つものではないとオズボーンは主張するのである

以上述べてきたように、プラトンの『饗宴』におけるエロスを根拠にして、ニーグレンの主張にオズボーンは反対する。反対の立場に立った上でアガペーもエロスも共通の意味をもった言葉であることを示す。そして「二つの言葉の間には重要な相違は全くない」というオリゲネスの言葉に同意し、無償の愛と、他者に何かを求める自己中心的な側面の両方を持つ言葉であると主張する。

2 節 アガペー

アガペーという言葉がオリゲネスがどのように理解していたのであろうか。

『ヨハネによる福音注解』で、愛（アガペー）はキリストを通して働き、人間が霊的に成長することを助ける。そのようにして、神からの愛（アガペー）を心の内に持った人間は十字架上のキリストを誇りに思い、神と人を愛するようになると語る。『雅歌注解』では、神の愛は、神の独り子であるキリストが人間になるという謙り（kenosis）の中に現われている視点に立って神は愛（アガペー）であるとオリゲネスは語る。『ヨハネによる福音注解』においても『雅歌注解』においても十字架上のキリストや受肉して人間の罪の償いとして死んだ子の中に神の愛（アガペー）が現われているとオリゲネスは考える。しかし他方で『ヨハネによる福音注解』においても『雅歌注解』においても、割合は少ないながらも、愛（アガペー）という言葉が、この世や悪魔や闇を愛するという文脈でも使われ、この世的なものを愛する愛を表すためにアガペーを使うことができると考えている。

3 節 エロス

私は『雅歌注解』で使われている 115 例のギリシア語のエロスに該当するラテン語の言葉を考察した。そのうち 81 例が、魂が、欠けた何かを充足しようとする動きに関するものであった。例えばイサクはリベカを愛した（adamare）というように異性に対する愛（Prologus-2-23.）、あるいはお金に対する愛（amor）（Prologus-2-39.）さらに虚栄を愛し（cupidus）（Prologus-2-39.）というようにこの世的なものを求める愛として使われている。このエロスは知恵に対する愛（エロース）（amor）（Prologus-2-22.）と言う形でも使われる。さらにこのエロスは魂を地上から天の一番高い端まで導いていく愛（エロース）（amor）であり、それは渴望の渇きによって呼び出されるものである（Prologus-2-1）。ここで述べられているエロスは対象が善いものであれ、悪いものであれ自分に欠けているものを満たし自分を充足させるために使われている。自分に欠けているものを満たし自分を充足させると言う意味で、その対象が異性であれ、金であれ、虚栄であれ、知恵であれ、

天の一番高い端であれ、このエロスはニーグレンが指摘する上昇のエロスの考え方と一致するように見える。

しかし、オリゲネスにおいてエロスはニーグレンが指摘するエロスとは別の使われ方もする。

『雅歌注解』第3巻－14－9で述べられているように。花婿であるキリストは花嫁である教会に愛(エロース)を感じている。花嫁を愛する(amare)花婿は死すべき花嫁に代わり、死んだ。教会である花嫁に代わって死んだ花婿は、人々にとっては大祭司であり、その大祭司は人々に代わって死んだとオリゲネスは語る。この大祭司とは、「ヘブライ人への手紙」9章11節～14節で述べられている人々のために死んだキリストである大祭司である。彼は、花婿が花嫁に愛を感じているように、人々に愛を感じていると考えられる。ここで述べられている愛は「ヨハネ第1の手紙」4章7節～10節で述べられている神の愛であり「わたしたちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(日本聖書協会新共同訳)という、神が受肉することによって表現された愛である。その愛を「エロス」という言葉を使って表現することができるとオリゲネスは語っているのである。

以上述べてきたように、「エロス」は、主に、この世的なもの等に対する渴望の渴きによって呼び出されるもののために使われる言葉であるが、受肉した神の愛を表現するためにも使うことができる言葉であるとオリゲネスは考えている。

4 節 アガペーとエロス

ニーグレンは「十字架の上に示された愛は神ご自身の愛である」と考え、この愛こそアガペーであると彼は主張する。それゆえエロスという言葉でも神の愛を表現することができると思うオリゲネスは、プラトン主義者であって使徒以来の伝承に立っていないという結論に達する。

オリゲネスはアガペーという言葉とエロスという言葉とを相互に置き換え可能な言葉と考えている。その具体的な例を見ていくことにする。

『雅歌書注解』の序文で cupidus や amor という愛(エロース)を caritas や directio という愛(アガペー)という言葉を使ってオリゲネスは表現する。³⁴ さらに『雅歌書注解』の序文でオリゲネスはある男を愛した女を例に挙げている。ある男を愛する(amare)ことで燃え上がり、そして愛する(cupere)と言った直後に、愛する(diligere)男をその女ば喜ばすとオリゲネスは表現する。³⁵

同じく『雅歌書注解』の序文、前例のすぐ後で、完全な愛(アガペー)(caritas)について語る。心の全てをかけて、魂の全てをかけて、力の全てをかけて愛し(amare)熱くなる

³⁴ Origene, Commentaire sur le Cantique des Cantiques, ed, H. Crouzel, Paris, 1961, Prologus-2-20.

³⁵ Ibid., Prologus-2-43.

ことで完全な愛（アガペー）（caritas）が実現すると主張する。³⁶ 即ち、アガペーはエロスによって実現すると語っているのである。

『雅歌書注解』の第1巻でオリゲネスは花婿の胸に向ける愛について語る。「花婿の胸に向ける愛（エロース）によって動かされることができる」と語った直後に「花婿の胸が愛される（diligere）でしょう」と述べる。同じ花婿の胸がエロスという言葉で表現される愛によって愛されると語られた直後に、アガペーという言葉で表現される愛によって愛されると語るのである。³⁷

『雅歌書注解』の第2巻で、愛（アガペー）（caritas）は全てを耐えと語っているパウロは、愛（エロース）（amor）の力によって語っているとオリゲネスは言う。さらに『雅歌書注解』第3巻で知恵の美しさを愛する人（amator）は知恵を愛する（diligere）人でもあると述べる。³⁸ 又、オリゲネスはアガペーとエロスを「アガペーやエロス」という形で5ヶ所で並列的に並べて愛を表す言葉として使う。³⁹

以上述べてきたようにオリゲネスはエロスという言葉のアガペーという言葉に置き換え可能な言葉として理解しているのである。しかし、神はエロスであるということ、エロスはこの世的なものを求める愛を意味することのために多く使われているので、より弱い人たちは誤解して躓くかもしれない。そこでオリゲネスは語るのである。

『雅歌注解』序文-2-20（Prohgus-2-20）

「しかしながら聖書はエロスという表現が読者を躓かせることのないようにしているように思える。即ち、より弱い人たちのために、この世の賢者がエロスと呼んでいる言葉に対してよりよい言葉、即ち、アガペーを使っている。」

しかしアガペーとエロスは置き換え可能な言葉であるのでアガペーという言葉さえも「読者を躓かせる」可能性を持っている。ダビデの息子アムノンが妹タマルをレイプしたという聖書の箇所を引用して、エロスの動詞形を使うべきところをアガペーの動詞形を聖書は使い、「（ダビデの娘タマルを）愛した（admire）という代わりに、愛した（diligere）と置き換えた」とオリゲネスは述べる。⁴⁰ だから、オリゲネスは「神はアガペーである」という言葉に不安を持つ。

³⁶ Ibid., Prologus-2-43.

³⁷ Ibid., 1-6-4.

³⁸ Ibid., 3-7-2.

³⁹ Ibid., Prologus-2-44. Ibid., Prologus-2-45. Ibid., Prologus-2-47. Ibid., 2-11-3. Ibid., 3-7-2.

⁴⁰ Ibid., Prologus-2-20.

『雅歌注解』序文－2－38 (Prologus-2-38)

「愛（アガペー）は神のものであり、神の贈り物であるのに、必ずしも、人から出ても神に属することや神が望むことへと向かわず、神の動きとみなされていないようにみえる。」

以上述べてきたように、3世紀のアレクサンドリアにおいてアガペーという言葉は必ずしも神の愛を表す言葉として限定されたものではなく、エロスという言葉と置き換え可能な言葉であったのである。